

キャリア教育

— 地元との共生を通じて —

田中英子（慶風高等学校）

はじめに

本校は、広域通信制課程普通科として、平成17年4月和歌山県海草郡紀美野町に設立した。平成25年12月1日現在、生徒数151名の生徒が在籍している。教育目標は「自主・友愛・創造」で「愛情をもって根気よく」の指導理念のもとに、教員と生徒相互の温かい人間関係を通じ、生徒一人ひとりの能力・適性を考慮し、自分の希望の進路に向かって努力する生徒を育成している。

本校の生徒は、①レポート作成②スクーリング③試験という過程を経て、単位を取得し卒業していく。本校の役割は、生徒にまず「高等学校卒業」の資格取得をさせることである。従って、本校では卒業に必要なレポート指導、スクーリング、試験の3つのことに教職員が一丸となってこれを推し進めている。

1. 本校の実態と課題

(1) 生徒の特徴（通信制）

本校の生徒の特徴は、ほぼ下記のグループに分けられる。

- ① 不登校・発達障害・低学力のために公立高校や他の私立高校に進学しなかった生徒。
- ② 特定のスポーツ（野球・テニス・ゴルフ）の力を伸ばしたい生徒
- ③ 公立・私立を含めて他の高校からさまざまな理由で転入してきた生徒である。

(2) 進路状況

卒業後の進路については、平成24年度は大学進学15名、専門学校11名、就職15名、未定10名である。就職については、大変難しく、福祉関係以外の業種の求人が少ない上、正社員としての雇用も少ないのが現状である。そんな中で、希望通りの進路決定生徒の特徴をみると、進路別に次のようになっている。

- ① 進学の場合は2通りある。
 - i AO入試・指定校推薦・推薦入試・一般入試を利用して、希望の大学・短期大学・専門学校進学する生徒。
 - ii スポーツ推薦での進学は、テニス部所属の生徒（インターハイ出場）や野球部の生徒である。
- ② 就職の場合は3通りある。
 - i 在学中、アルバイトを長期にわたりしている生徒で、仕事に対する意欲やコミュニケーション能力があり、就職担当教員の指導もとに就職を決めていく。
 - ii スポーツコースの生徒は、コミュニケーション能力があり就職試験に受かりやすい。
 - iii 療育手帳を所持している生徒は、障害者枠で一般企業に就職。

(3) 課題

大学進学は、上記進路状況から、比較的希望通り合格する。専門学校も同様である。ところが、企業の求人があっても就職できない生徒が多いのが現実である。

就職できない理由としては、コミュニケーション能力などの全般的な能力不足が挙げられる。高卒後、

1年間ぐらい職業に就くための訓練期間が必要を感じている。もちろん、1～2年間職業訓練を受け、就職を斡旋してもらえる職業訓練校はある。しかし、まず、コンピュータ・建築・自動車工学・観光等に分野が限られていることと学力試験があり、希望者全入というわけでない。また、農業大学校もあるが、こも学力試験や学費のために本校の就職希望の生徒には不向きである。

そこで、本校の課題は就職希望があるにもかかわらず、就職できない生徒の進路先を創出することである。

(4) 本校の取り組みの方向

和歌山県の主な産業は農業である。そんな中で地元での就職を希望する生徒にとっては、将来自立することも考え、「農業」に従事できる力をつけることが最善の道であると考えられる。

そこで、彼らが「仕事をしながら農業技術を学べる場」の創出が必要である。農業は、サービス業と異なり自然が相手なので、技術習得に時間がかかる。また、時期や作物によって作業工程が様々である。そこで、1年間「農業研修」しながら、「草刈り」や果樹栽培の繁忙期の援農アルバイトや「加工品」の下請け（みやげものの袋詰め）のアルバイトをすることを主な取り組みとしたい。そして、農業研修後の進路は、地元の「農業生産法人」や「農産加工品会社」への就職や「農業」従事を考えている。

2. 和歌山県の農業

和歌山県は全国有数の果樹生産をはじめ、野菜や花きなどの分野で、品質の良い農産物が生産されている。

職業としての農業を考える上で、まず和歌山県の農業について現状を把握し、その課題についての打開策について考えてみたい。

(1) 和歌山県の農業の特色

- ① 農業の*特化係数は、全国 11 位で、和歌山県にとって農業は重要な産業である。
*特化係数=県内総生産の産業別構成比÷国内総生産の産業別構成比
- ② 兼業農家を中心に農家戸数全体が減少し、農業就業者も減少。
- ③ 65 歳以上の就業人口は、平成 2 年の 30%に対して平成 22 年 52%で、高齢化が進んでいる。
- ④ 近年、U・I ターンなど 40 歳以上の新規就農者が増加。
- ⑤ 耕作放棄地が、昭和 60 年の 959ha に比べ 3,647ha で 3.8 倍の増加である。これは、全耕地面積の 12%に及ぶ。
- ⑥ 急傾斜耕作地が多く、経営規模拡大が進みにくい。

(2) 課題

- ① 就業者の高齢化と減少が、耕作放棄地を増やしていること。
- ② 鳥獣の被害は、平成 24 年 3 億 5288 万円に達している。原因は、上記の耕作放棄地の増加や気候変動などが原因であると考えられる。

上記の課題の打開策として、高卒生が農業に参入することである。

3. 農業体験について

ここでは、生徒が「農業の基礎」を学び、職業として「農業」を考えるきっかけとして実践した農業体験について述べる。

(1) 体験学習対象生徒

通信制という制約のために生徒と接する機会が乏しい。しかし、本校の①グループの生徒はレポート指

導及び基礎学力定着のために、週に5日和歌山市内の「支援センター」に登校する。今回、この生徒を対象に、農業体験を実施した。

(2) 農業体験の目的

目的は体験を通じて、「育てる喜び、働く喜び、そして、収穫物を味わう喜び」を体験できることと、職業選択のひとつとして「農業」という仕事を考えることの2点である。

(3) 農業体験の実施

① 実施場所

本校（海草郡紀美野町）ではなく、和歌山市内にある学習支援の場所である「支援センター」より自転車で10分ぐらいの耕作放棄地（125平方メートル）で実施した。

② 農業体験生徒の人数は11名である。男子が8名。女子が3名。

③ 農業体験の流れ

[5月～9月]

- i 畝作り 機械がないので、クワとスコップで行う。肥料についてアトピー性皮膚炎の生徒がいるので、農薬を使用しない。また、なるべく有機肥料を用いる。
- ii 支柱が必要な野菜（ミニトマト・ナス）には支柱を設置する。
- iii 定植—ミニトマト・ナス 種イモ—紫イモ 種まき—ダイコン
- iv 水やり 交代で行う。最初は、畑の側の農業用水路（水田用）よりバケツ・ジョウロ・大きなひしゃくで行う。稲の収穫前の用水路は水が干上がる。そのため、水田用の水タンクを設置。
- v 草とり
- vi 収穫 ミニトマト・ナスを順次収穫—地域の介護施設で食べてもらう。おいしいとの評判であった。昨年の夏はとても熱く、しかも10月ぐらいもその暑さが続いて作業に大変苦勞した。暑さで、作業できる日が少なかった。

農業用水路の水は稲作用なので、近くの井戸から水をもらう。

vii 草刈り機の使用 学校職員より草刈り機の安全な使い方を学ぶ。

[10月～1月]

- i 収穫が終わった苗の片付け。（第1畝と第2畝） 紫イモの収穫・・・意外と大きく、生徒喜ぶ。
- ii 第3畝第4畝第5畝を作る
- iii 肥料（草肥料・苦土石灰・牛フン）を投入
- iv 定植及び種蒔き ブロコリーの苗植え付け（第3畝）キャベツの苗植え付け（第4畝）ダイコンの種まき（第5畝）

[12月・1月]

草取り・収穫 1月にダイコンを収穫

④ 生徒の感想

農作業については、10月ぐらいまで暑かったので、「暑くて本当にしんどかった。」というのが多かった。しかし、「ミニトマト・ナス・イモ・大根が収穫できたときは嬉しかった」というのが大半であった。また、農機具の使い方に習熟できてよかったという生徒もいた。当初、「農業なんか嫌いだ。」と言っていた生徒が、「いい汗をかいた」と言うのを聞いたときは、体験学習の成果を感じた。卒業後の職業として「農業」を希望する生徒がでてきた。また、収穫物の地元の福祉施設に差し上げて大変喜ばれた。

おわりに

キャリア教育に、普通科の生徒が「農業」を職業体験するにあたって、「田植え」や「収穫」だけ一時の取り組みでなく、畝づくり・草とり・水遣りなど“おもしろくない仕事”を継続的に体験させることが必要だと考えた。そのため、従来の3日から1週間ぐらいの職業体験ではなく、今回8ヶ月の体験を設定した。仕事の様々な面を知ることができて、良かった。

生徒は仕事の大変さを実感すると同時に、達成感や充実感を感じることができたと思う。近くの農家の人との交流は、不十分で課題が残った。

今後、卒業後、1年間「農業研修」をしながら、休耕地等での草刈りや繁忙期の援農、また、農産加工品の下請けをしたアルバイト収入を得るなど地元との共生を図りながら、積極的に「農業」の仕事に関わっていききたい。そして、研修後、地元の「農業生産法人」や「農産加工品製造」の会社に就職、また「農業」に従事できるよう取り組みを充実させていきたい。

参考文献

1. 和歌山県農林水産部のホームページ
2. 神門善久 2006年「日本の食と農」NTT出版
3. 松尾英輔 2005年「社会園芸学のすすめ」農山漁村文化協会
4. 生源寺真一 2010年 「農業がわかると、社会のしくみが見えてくる」家の光協会
5. 結城富美雄 2009年 「地元学からの出発」農文協
6. 根本久 2013年「野菜を病気と害虫から守る本」NHK出版
7. 藤田智 2013年「野菜づくり大全」NHK出版
8. 2015年4月～2016年2月 「趣味の園芸 やさいの時間」NHK出版
9. 2010年 「現代農業 2010年8月増刊 季刊地域—高齢者応援ビジネス」
10. 2011年 「有機・無農薬での野菜づくり12ヶ月」株式会社学研パブリッシング